

「愛」

(マタイによる福音書22:34-46)

人間の愛には限界があります。しかし、神の愛に限界はありません。

創世記で神は人間を造り、「極めて良い」と言われました。その思いは心底深いもので、神は人間をどこまでも憐れみ、愛し抜かれます。主イエスの十字架の出来事によってこそ、その愛が示されました。ご自分の独り子、御子の命をも差し出すほどの愛。その愛が、わたしたち一人ひとりに向けられています。その愛をいただくなら、枯れることの無い愛がわたしたちに注がれます。そしてその愛はわたしたちを通して溢れ出し、隣の誰かへと伝わります。そこに、枯れることのない隣人愛が実現します。どんなにひどい生き方をしてきた人も、どんなに人を愛することができないと思っている人も、その「あなた」を通してこそ、神の愛が溢れ、愛し合う人間関係が生まれるのです。

だからこそ、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」ということ、主イエスは「これが最も大事な第一の掟である。」と言われたのです。まず神との交わりがあり、その神との愛の交わりにおいて枯れることのない愛をいただくからこそ、「隣人を自分のように愛しなさい」という、愛の実践、愛に生きることができるのです。

主イエスは神への愛を「最も重要な第一の掟」と言いました。そして「第二も、これと同じように重要である。」と言って、隣人愛を挙げました。ここでの「第二」は「重要さ」の序列を意味するものではありません。ただ順番を挙げているだけです。神への愛と隣人愛は重要さにおいて同列であり、両者は表裏一体です。しかし、人間から出る愛には限界があるから、神からの愛に気づくことが、すべての始まりなのです。

クリスチャンは、十字架の縦と横の交わる場所、中心を歩む存在です。縦は「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」ということに表される、神との交わりです。そして、横は「隣人を自分のように愛しなさい」という隣人との交わりです。そしてその交わる中心、真ん中にあるのが「愛」です。どんなに神を信じている、と言っても、そこに愛がないなら意味がありません。どんなに隣人を大切にしている、と言っても、そこに愛がなければその関わりは虚しいものになります。また、縦だけの関係だけでも、横だけの関係だけでも、人は生きていくことはできません。「わたしには隣人は必要ない、神さまだけいれば」などというのは、「隣人を愛しなさい」と言われる神との交わりに、正しく身をおいていないということです。また、人の愛には限りがありますから、人間だけの横の交わりだけでは、愛は枯れてしまいます。ですからわたしたちは日々、自分は今十字架のどのあたりにいるか確認しなければなりません。横に傾いているなら、いつかその関係は愛の枯れたものになってしまうでしょう。また、縦にばかり集中しているようなら、神との交わりに歪みがあるかも知れません。そして、そのような縦と横のバランスを乱す要員は様々あります。ファリサイ派の

人々は、律法を守ろうと懸命になるあまり、律法に込められた神の愛を見失い、隣人への愛をも失ってしまいました。彼らが掟の文字にとらわれてしまったように、わたしたちもまた、日々のいろいろな「とらわれ」のなかで、神との交わり、隣人との交わりへの歪みへと陥ってしまうものだと自覚しなければなりません。そのときには、まず「これが最も大事な第一の掟である。」と言われたことを思い出し、神の愛に立ち帰り、神の愛をいただき、愛された自分、愛された隣人として命を見つめることから、再出発しましょう。神を愛し、隣人を愛する、十字架の真ん中、「愛」に生かされ、生きてまいりましょう。

＊ 「隣人」

「隣人」というギリシア語は「近くに」を意味する。神は苦しむ人間を見捨てず、具体的に救いの出来事を起こす。旧約聖書の歴史書はそのことを伝えている。その神の愛が「近くに」あるとき、わたしたちは隣人を愛することができる。隣人愛は、神がわたしたちを愛したことへのお返しだから。

＊ 「律法全体と預言者は、この二つに基づいている。」

「律法全体と預言者」とは、聖書全体を表す言葉。「基づいている」とあるのは、「掛かっている、ぶらさがる」という単語。この二つの掟に聖書全体が「掛かっている」ということ。そして、この二つの掟に共通するものこそ「愛」。どんなに沢山の掟を守ったとしても、愛を欠いているならば、それは無意味。愛がすべての掟の根拠であり、いのち。主イエスは、山上の説教で、「わたしは律法と預言者を完成するために来た」と語った。その「律法と預言者は神への愛と隣人愛に掛かっている」と、主イエスは教えている。